

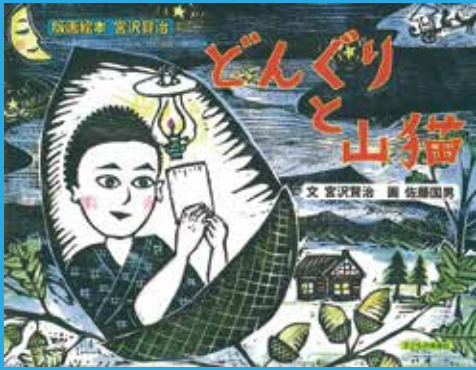
## 『どんぐりと山猫』

絵本は、感動を与えてくれる読みもの。大人になって読むと、それは一層強く感じられます。数年前から地元の小中学校で実施している読み聞かせボランティアサークルに参加するようになったからでしょう。出番が近づくと、絵本を読み漁る日が続きません。どの学年に行っても、もし、最初は落ち着かない子ども達もいて、いつの間にか物語に吸い込まれて最後は皆の目が絵本に注がれています。その目の輝きから子どもたちの感動が伝わってくるのです。

最近、季節ごとにそして、

学年ごとにレパトリーを用意するようにしました。例えば春。高学年には、さんしょうの木の精(子ども)が風(大人)になっていく心の揺れを切なく語る安房直子作『さんしょう子』。中学年には、薬売りが山道で次々と病人(地蔵)と出合い薬を分けてあげた後に目にする、光る桜の木を描いた<sup>はつきぎ</sup>簗木蓬生作『ひかるさくら』。低学年には、花の好きな女の子の絵からAI(人口知能)内臓のモグラを開発するはめになった国の秘密研究所という風刺が効いた星新一作『はなとひみつ』など。

しかし、なんといつても出



### 『どんぐりと山猫』

宮沢賢治 文／佐藤国男 画

子どもの未来社 本体 1,600 円＋税

ISBN 978-4-901330-75-6 C8771

「あした、めんどろなさいばんしますからおいでなさい」 ある土曜日の夕方、一郎のところへとどいた変なハガキ。だれがいちばんえらいのか、どんぐりたちの訴えに困った山猫はその判決を一郎に託すが…。

(子どもの未来社ホームページより引用)

ネットワーク編集委員が選ぶ 今号の一作

## 固定概念を見直すきっかけを 与えてくれたボランティア活動

番が多い作家は宮沢賢治だと感じています。最後に余韻が残る文章は、子どもたちと言葉を介さないコミュニケーションを取る事ができるからです。今号は、まだ暑い時期ですが暦の上では秋。どんぐりが登場する『どんぐりと山猫』を選んでみました。

この物語は、どんぐりたちが「自分こそが偉い」と騒ぎ立て、裁判官の山猫が手を焼く様子が描かれています。もう3日も裁判が続くものの伸直りをしません。背の高いどんぐり、頭が丸いどんぐり、尖ったどんぐり、大きなどんぐり、それぞれが自分こそが偉いと主張を続けます。そこに、一郎が助けを求め手紙を受け取って山へ「出頭」するわけです。言い渡しはこうです。「一番ばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが一番偉い」と。すると、どんぐり達はすっかりおとなしくなって一件落着。

異なる価値観をもって主張する者たちに、一郎は新たな価値観の提案をしたわけです。私たちは、日ごろ社会課題の解決には「新たな価値観」

をもって取り組まなければならない、などとよく発言しています。しかし、そもそも今の価値観から見直すことが出発点だと気づかれます。前回の出番は、特別学級での読み聞かせでした。短めの絵本がいいかなとあれこれ考えました。しかし、今までで最も静かに、にこやかに全員が絵本を楽しんでくれました。自分の固定概念を見直すきっかけをボランティア活動は与えてくれます

### 服部篤子 (はっとり・あつこ)

CAC 社会起業家研究ネットワーク代表、一般社団法人 DSIA 副代表理事。

立教大学大学院、明治学院大学等で兼任講師として教鞭をとる(専門は、社会起業論、非営利組織論)ほか、日本 NPO 学会副会長、公益財団法人日本女性学習財団理事などを兼務。主な編著書に、『未来をつくる企業内イノベーターたち』(2012 近代セーブルス社)、『ソーシャル・イノベーション: 営利と非営利を超えて』(2010 日本経済評論社) など多数。